

西部地区ブロック研修報告

○西部ブロック研修会 平成23年4月22日(金)

会場 浜松市立可美小学校

研修内容 ・各学校教室紹介、担当者の自己紹介、今後の研修について
・グループに分かれて話し合い、情報交換

○第1回 担当者講習会 平成23年7月9日(土)

浜北文化センター 第2会議室

テーマ「ペアレント トレーニングについて」

講師 内山 敏 先生

浜松市発達相談支援センター「ルピロ」所長 臨床心理士

乳幼児からの精神発達のテーマとして

- ・基本的信頼関係…自分が母親によって絶対的に守られているという感覚
- ・自尊感情…自分が「大切な存在である」とか、「自分のことが好きだ」という気持ち

の2つがあげられる。自尊感情の発達は、コミュニケーションの発達に深いつながりがある。つまり、人とかかわり合いがなければ、人のところは発達しないのである。人間不信、自己否定的感情、歪んだ自己愛のような精神発達の不全が引き起こす深刻な悩みを抱える家族を支援する方法として、ペアレントトレーニングが実施されている。

ペアレントトレーニングは、まず子どもの行動に注目し、ターゲット行動を分類することから始める。そして

- ① してほしい行動を増やすには…すぐにほめる、人間性ではなく行動を言葉にしてほめる等
- ② してほしくない行動を減らすには…その行動に対して注意を向けない(無視)ようにする
あらかじめ、対応するための予定を決めておく
子どもからの提案には取引をする
- ③ 断固として許せない行動をなくすには…基本的には、今まで出てきたテクニックを組み合わせる。

↓
自分や人を傷つける、物を破壊する

- ↓
- ・ 制限をもうける(指示) 視線を合わせ、冷静に
 - ・ ブロックンレコードテクニック
 - ・ 警告と罰(～しないと～なる)
 - ・ タイムアウト

参加者の方から、具体的なお話を聴くことができ、通級指導に生かしていくとともに、校内にこの考えを広げていきたいという声が聞かれた。

○第2回 担当者講習会 平成23年9月3日(土)

袋井市立中央・南公民館

テーマ「子どもの発達を支えるための関わり」

講師 小林 純代 先生

袋井市子ども発達支援チーム主任専門相談員

- ① 脳のネットワーク作りは6歳までが活発であり、10歳(小学校中学年)までの教育がその人を規定する。
- ② 子どもの発達には、規則正しい生活、身体の発達に添った十分な運動、情緒の発達を促すための安定した親子関係、遊びを通しての自己表現活動、分かり合うことばの習得が必要である。
- ③ 子どもへの声のかけ方として、ゆっくり話す、はっきり話す、繰り返しを多く使うことが大切である。

- ④ 子どもへの発達支援のポイントとして、話しかけると目を見つめたりなん語を話したりするか（５か月）、おもちゃで遊ぼうとしたり人見知りをしたりするか（７か月）、指差しをしたり不安な時や痛い時に親を見るか（１０か月）を考慮する。
- ⑤ ワーキングメモリは、情報をとめておけるスペースのようなものであり、基礎学習においてはIQよりも影響が大きいと考えられる。
- ⑥ 小林先生から提示された事例について、どのような対応や支援ができるかを少人数で検討した。検討後、具体的な対応や支援方法について、順に発表した。事例についての話し合いであったが、各自の指導経験を反映した情報交換の場ともなった。
- ・ 教育相談は、両親を基本として行うとよい。
 - ・ 目標設定をスモールステップにし、成功体験を積み重ねていけるようにする。
 - ・ 安心できる居場所作りをしていく。
 - ・ 二項関係で安定させてから、友達を交えていく。

○第３回 担当者講習会 平成２３年１１月５日（土） 浜北文化センター
テーマ「乳幼児期の視知覚と運動発達の関係を踏まえた就学後の介入の基本的な考え方」

講師 野藤 弘幸 先生

浜松大学保健医療学部 作業療法学科講師 作業療法士

１ 目と手の働きを主とした発達過程

- ・発達障害（主にPDD）をもつ子どもの中に、「目が合わない」子どもが多いが、これらの子どもは、視野の中心で物を見るのが苦手で、視野に映る全体を眺めるように見ている。そのことから、目が合わないようだが、子ども自身は見ている。
- ・生後３か月になると、眼球が正中線を横切って物を目で追い出す。しかし、これは、左脳と右脳の協調的な働きが要求されるので、脳の発達に偏りが見られる発達障害の子どもたちは苦手とする目の運動である。このことから、LD児は、視覚的に問題が起こりやすい。
- ・生後６か月で眼球運動は完成する。また、生後６か月頃には、右脳と左脳のはたらきに優位性がみられてくることから、利き手としての手のはたらきが見られるようになる。左脳に言語野がある人は右利きになる可能性が高い。生後７か月頃に模倣が始まる。これは学習の始まりである。

２ 支援について

- ・LD・・・思うようにできない、人と違う自分に気付きギャップに苦しむ。自尊心の低下は２歳くらいから感じる子もいる。早くその子にとっての課題設定上の「上限」を決めてあげたほうがいい。そうでないと、できないことを要求し、自尊心を低下させることがある。また、正中線の問題では、眼球を右から左へと動かさなくても良いように、ノートを左、もしくは右の片側に置くなど、視線が正中線を横切らなくても良い方法を伝えることもヒントとなる。
- ・ADHD・・・「注意散漫」でなく「注意がひとつにしか向かない」ということである。目に見えている時、その時その時にどうやったらうまくいくか教えていくことが大事である。
- ・PDD・・・「人」というものを感じ取る力が弱いので「自分」というものがわかりにくい。「自分」のことがわかりにくいので、「他人」のことは更にわかることが難しい。○と×をはっきり教えること、標語のようにして教えるとわかりやすい。
- ・ADHD、PDD・・・音声は効果が薄いのでメモで伝える。メモは、何回も確認ができて、繰り返し確認するうちに記憶として残るのでよい。目で見て確認できるように伝えるとよい。
- ・発達障害の子は、手先がうまく使えない子が多い。教材としては、線を引く時には「裏にゴムが付いた定規」、鉛筆を正しく持てるようにするには「三角鉛筆」や「もちかたくん」などを使うとよい。

○第4回 担当者講習会 平成23年11月19日(土) 浜北文化センター 第2会議室
テーマ 「保護者への対応と教育相談」

講師 内山 敏 先生

浜松市発達相談支援センター「ルピロ」所長 臨床心理士

発達障害児への対応の基本は、発達障害のある子どもの視点で考えてみることにあります。発達障害のある子どもは、認識や関係性の発達の遅れがあり、本人を変えることは難しいために療育の手法を利用した個別支援をベースに小集団でのコミュニケーションの練習が有効である。

保護者の心理は、保護者にとって障害の意味合いがそれぞれ違い、不安や混乱がある。特に子どもの障害の程度や状態が分かりにくいことや年齢と共にあらわれや症状が変化することで障害の受容過程でも混乱しやすい。



保護者への対応では、保護者のSES(socio-economic status: 社会経済的地位)は大事な要素であり、これによって、支援方法も変わってくる。子どものことを保護者に伝える際に「その子どもにとっての困り感」を全面に出していくことで、協働体制が作りやすくなる。

「これはNG」「これならOK」と対応の仕方の具体的な例も示していただき、参加した担当者たちからは、明日からの自分の指導で早速実践してみたいという声が聞かれた。

○第5回 担当者講習会 平成23年12月3日(土) 研修交流センター 51研修交流室
テーマ 「吃音指導への提案」

講師 中野 泰子 先生

浜松市立葵が丘小学校の通級指導教室(言語)担当

中野先生より、吃音の歴史・原因などから始まり、相談の仕方、分析方法、指導の移り変わりなどについてお話があり、基礎的な知識として担当者がもっておかなければならないと思った。

吃音指導は、以下の3つの柱が基本となる。

- 1 言葉を育てる。
言葉を豊かにし、言葉への直接的・間接的アプローチを行い、吃音症状を軽減する。
- 2 子どもの発達全体を育てる。
言葉以外の部分にも目を向け、発達全体を育てる。
- 3 子どもを取り巻く環境を整える。
担当者と子ども、担当者と保護者の信頼関係を築く。

* 3本を柱とし、あとは子どもの実態に合わせて工夫する。

その後、具体的な練習方法や教材、指導の実際をビデオで見た。グループ指導の様子も見ることができ参考になることがたくさんあった。日頃、吃音の指導について悩んでいたが、どのように子どもと接し支援をしていけばいいのかがよく分かり、有意義な研修会だった。

○第6回 担当者講習会 平成23年12月10日(土) アイミティ浜松第1講習室
テーマ 「農業と福祉の良い関係！誰もが参画できるユニバーサル農園の挑戦」

講師 鈴木 厚志 先生

京丸園(株)代表取締役

1 障害者受け入れ

17年前、面接に来た障害者の母親の「給料はいらないので働かせてください」という言葉を聞き、「働く」ことの意味を考えるようになった。何とかしたいという思いで、カウンセリングの勉強をし、資格を取った。受け入れてみると、パートさんたちが障害者を支えようとし、職場の雰

困気が優しく変わり、さらに、生産効率が上がった。障害を持った人の仕事の量は少なくとも、他の人の作業効率が上がればトータルとして OK。ボランティアではなくビジネスとして取り組もうと考えた。

2 ユニバーサル農業を目指して

① 組織の再構築 — 障害者が参画できる仕事・やり方は障害者に学ぶ

水耕部、土耕部と障害者が所属する心耕部で会社を構成した。心耕部では、どのような働き方をしたいのか個人の希望や体調に適したプログラムを立てるようにした。

② 作業場の改善（現在のやり方の見直し・ハード面の変革） — 障害者が働きやすい環境

例）・樹脂トレー洗浄機 ・虫取り掃除機 ・ミニチンゲンサイ定植用パレット

③ ソフト面の改善 — 分かりやすい指示や相談しやすい配置

例）・ボードに作業内容を提示する。 ・自分が作業した物にネームプレートを付ける。
・数値で示す。

④ 他機関との連携

生活就労支援センターで面接相談や訓練等をしてもらい、福祉のプロに判断をしてもらう。社外にも社内にも相談できる場を作ることが大切である。

○第7回 担当者講習会 平成24年1月21日（土） 浜松市立積志小学校 すいせんルーム
テーマ 「音楽を使つてのことば・発音の練習（^）/」

講師 浅村 友子 先生

浜松市立北浜小学校の通級指導教室(言語)担当

☆ 内容紹介 ☆

浅村先生は、リズム遊びや歌遊びなど、音楽の要素をふんだんに取り入れながら楽しく発音練習や語彙の指導を進めています。明日からの授業ですぐに使えるリズム遊び・歌遊びを楽しみながら実習しました。



曜日の歌、あいうえおの歌、発音練習の歌、出会いの歌、反対ことばの歌など、浅村先生作詞作曲の歌を動作をつけたり身体を揺すったりしながら、リズムに乗って歌った。参加した先生方からも、「これなら、発音の練習が楽しくできます。」「子どもがとっても喜びそうです。」「分かりやすくてすぐにできそうです。」等の感想が出された。

指導のポイントや通級児とのふれあいを大切にしていることなどをエピソードと共に楽しく話していただき、有意義な研修会となった。

テーマ「軽度発達障害児童への支援と保護者への対応」

講師 岩澤 一美 先生

星槎大学附属発達支援臨床センター主任相談員 星槎大学講師

通常の学級にいる発達障害と思われる子の問題点→わかりづらさや社会的不利さが見えない

原因 バランスの悪さ、特定の力の落ち込み

WISC-Ⅲから分析

- ・ 言語理解の落ち込み…話を聞いても理解できない。
- ・ 知覚統合の落ち込み…図形が弱いため、目から見たものを真似できない。
- ・ 注意記憶の落ち込み…集中力に欠ける。聴覚からの記憶が苦手。
- ・ 処理速度の落ち込み…視覚からの記憶や作業が苦手。 例：板書の写しができない。

適切に指導していくために、その子その子の特性を見極め、それに対応する支援を考える。

具体的な支援方法 その1・持ち物

- ・ クリアケースを利用→取り出さずに中身を確認できる。（紛失、散らかしを防ぐ）
- ・ 筆記用具の工夫→音に敏感な子への対応
布の筆記用具入れ（落としたときの音への配慮）
シャープから鉛筆へ（芯が折れるとイライラすることへの配慮）
キャップ付きペンからノック式ペンへ（キャップは紛失しやすい）

具体的な支援方法 その2・行動

- ・ 必要以上に大きな声を出す子
声の大きさを具体的に示す。例：「今の声はレベル 40 だから 30 にして」
- ・ 座席の位置
ADHD 傾向が強い子… 外部刺激に弱いため、刺激が入らないようにする。
窓側は×。教卓の前が適当。
自閉傾向が強い子… 人から注目されるのを嫌う。他人の視線を気にしない場所。
教卓の前は×。窓側後ろか廊下側後ろが適当。
アスペルガー傾向の子ども同士は離すことでトラブルを避けることができる。
- ・ 指示を行動に移せない子 ◎1 回に 1 つの指示で、簡単かつ明瞭に指示を出すことがよい。
原因の大半は教師の指示にある。

例：「ロッカーにハサミを置いてきましょう」…教師は自分のロッカーにしまってくることを意味して出した指示だが、言語理解や注意記憶に落ち込みがある子はロッカーの上にハサミを置いてしまう。

具体的な支援方法 その3・感情

感情の爆発への対応（泣く、叫ぶ、暴言、物や人にあたる）

- 1、まずは落ち着かせる。静かな場所へ移動
- 2、一緒に振り返る。その子の言葉で振り替えさせることで自分で気づくことができる。
- 3、これからのことを一緒に考える。「もうやらないと約束しよう」は×。

現在は何の子もソーシャルスキルを持っていない。そのため、みんなで助け合うことで、クラス・学校の力が高まる。そのためにも全職員で助け合っていくことが大切である。

テーマ「WISC-Ⅲの検査結果の解釈と支援について」

講師 鈴木 美枝子 先生
静岡北特別支援学校 教諭

ア 発達障害の概要について

- ・ 発達障害とは、発達の凸凹＋適応障害＝発達障害
- ・ 発達障害の子どもは増加傾向→従来の方法では対応が困難
- ・ 対応としては、周囲への迷惑レベル、二次障害の発生を把握し、カウンセリングや病院へ受診

イ WISC-Ⅲの検査について

WISC-Ⅲの構成

知能指数		群指数	
全検査 IQ (FIQ)	言語性IQ (VIQ)	言語理解(VC)	知識・類似・単語・理解
		注意記憶(FD)	算数・数唱
	動作性IQ (PIQ)	知覚統合(PO)	絵画完成・絵画配列・積木模様
		処理速度(PS)	符号・記号探し

WISC-Ⅲの解釈の流れ

レベル1 知的水準・・・相対的な位置	レベル2 群指数の特徴
レベル3 評価点プロフィール分析	レベル4 質的分析
・ 背景情報との照合（担任や保護者からの情報）	・ 行動観察（例：分からないという）
・ 反応内容	・ 他の検査との比較
	・ 学業との比較

検査により把握

1	心身機能・構造レベル	障害の生物学的・心理学的問題を明らかにする。
2	活動レベル	具体的に何ができて、できないかを明らかにする。
3	参加レベル	生活上どのような困難をどの程度抱えているか（あるいは将来抱える可能性があるのか）を明らかにする。

ウ その他

- ・ WISC-ⅢとK-ABCの比較
- ・ WISC-Ⅳについて
- ・ 資料→「群指数の分析から考えられること」

エ 参加者の感想

- ・ WISC-Ⅲの検査分析はもちろん検査中の行動観察の大切さについても教えてもらえてよかった。
- ・ 分かりやすい内容と資料で、明日の指導につながる研修だった。
- ・ DN-CAS、WISC-Ⅲの結果の影響など幅広く知ることができた。

掛川からも、2名の先生の参加をいただき、熱気あふれる有意義な研修となった。鈴木美枝子先生にはWISC-Ⅲについて詳しく説明していただいたのみならず、K-ABC、WISC-Ⅳ、DN-CASなどの検査についても教えていただいた。先生からは、子どもの特性に応じた困難例とその支援例が詳しく記された貴重な資料をいただいた。

テーマ「子どもも大人も いま ここを大切に！」

～それでいいよ、だいじょうぶ を保育の合言葉に！～

講師 久保山 茂樹 先生

特別支援教育総合研究所主任研究員

1 保育の合言葉・・・「それでいいよ だいじょうぶ」

小学生のとき逆上がりができなかった。体育の時間、「がんばれ」コールをされるのがつらかった。「どうしてできないの？」もつらい。そんなとき、「逆上がりはできなくても、〇〇はできるね。」と言われると、ほっとした。

○ 支援が必要な子どもの周囲の人々の悩み

「私の指導力が・・・」「私の育て方が・・・」と自分を責めたり、「私がなんとかしなければ・・・」という責任感に押しつぶされそうになったりする。

○ 子どもが困っている

「あの子がいるから、私は困る、悩む」でも、「あの子はどう思っているんだろ。あの子の困った行動には、きっと理由がある。」子どもの立場で考えてみる。

○ 一番「こまっている」のはお子さん本人

「こんなにがんばっているのに、がんばるだけではうまくいかない！」

「こんなに良いところがあるのに、どうして、ほめてもらえないの！」



- ・ SOSがうまく出せない。
- ・ 良さが見えにくくなってしまう。



- 自分が好きになれない＝自己肯定感が高まらない。

○ 「子どもがこまっている」と考えることができれば、責任追及をしなくていい。

先生も保護者もがんばってきた。逃げずに向き合ってきた歴史がある。試行錯誤の中に必ずヒントがある。うまくいかなかったことも大事なヒント。だから、みんなでつながって考えよう。子どものこと、保護者のこと、先生のことを。

○ 保護者も先生も一人ではない！

- ・ ヨコのつながり・・・ひとりの子どもをいろんな人の力で育む。

SOSも、知恵も、自由に出せる雰囲気や園内に作り、園を開いて専門機関とつながる。

- ・ タテのつながり・・・ここまで育てました。これから、よろしく！

「親子の歴史」を尊重し、自分たちの園のワザ、エピソードを小学校に引き継ぐ。

特別支援教育は、「つながる教育・保育」である。

2 苦手さがあっても、今、ここを、懸命に生きる子どもたちとともにあること

○ 幼稚園が、保育園が変わる

「まわりがかわる」

- ・ 周囲の人がかわりを変える。
- ・ 物理的な環境を変える。
- ・ 周囲の人が見方を変える。→ できないことがその子の全てではない。良さを見つける。

- まわりが変わることで、うまくいくための条件を探る
発想の転換→ 「どうして〇〇できない！」だと、子どもを責めることしか考えられない。
「〇〇できるのはなぜだろう？」なら、具体的な手立てを想定できる。

3 すべての子どもが過ごしやすい環境作りへの提案

- うまくいくための作戦会議と作戦の貯金
 - ・ 成功体験→「わたしだってできるんだ」→自己肯定感
 - ・ 不必要な失敗経験を積み重ねないこと
 - ・ 「視力は正常でも、見えにくいかも」「音声だけでは理解できないかも」「刺激に敏感かも」と、想像して試す。診断がなくても保育者の経験・ワザが活用できる。

- すべての子どもが過ごしやすい環境作り作戦
「子どもに伝わる『ことば』を使おう」
 - ・ 音声のことば ・ 視覚のことば ・ 動作のことば（コミュニケーションの基本）

「わかりやすい予告で、見通しを持ってもらおう」

- ・ 1日の流れを掲示
- ・ 終わりの時間を長針で示す
- ・ プログラムに今やっているところを印で示す（入学式、運動会など）
- ・ 全体への声かけ＋個別のひと声

「居場所を作ろう」

基本の居場所は、もちろんクラス。しかし、他の場所を認めることが必要な子どももいる。その子には、少なくとも1日1回は、クラスの大切な一人という「時間」や「ことばかけ」を！

「いま、この子どもを認めよう」

「できるーできない」で見てその子を全否定するのではなく、「いいなあ！好きだなあ！おもしろいなあ！」とよいところを見る。「いま持っている力で、何ができるだろうか？何が楽しめるだろうか？」と考えよう。「比べる相手は、他児でなく以前の本児！」

子どもたちに伝えたい・・・「それでいいよ、だいじょうぶ」

〈基本的信頼感「受け止めてもらえた」、達成感・成就感「ここまではやったぞ」〉をベースに、
〈〇〇さん用の作戦の蓄積「こういう工夫があれば大丈夫さ！」〉をすることで、自己肯定感（自分を大切に思う心、そして、他者も大切にできる心）を育む。